

## 大学3年次以降での英語力の必要性 －試行調査の分析から－

教育センター外国語教育推進部 特任講師 村山陽平

キーワード：一般教育英語・専門英語・英語力の必要性・学士課程教育・アンケート調査

### 1. はじめに

鹿児島大学での学部生向け英語科目は現在、一般教育としての英語科目と専門英語科目の2つから成っている。まず、全8学部中3学部では1年次後期まで、残る5学部では2年次前期まで、各学生は教育センターが管理運営する一般教育英語科目を履修する。その後、所属によっては、学部が設置する専門英語科目を学ぶことになる。各英語科目担当教員の協力のもとでこの実施体制が維持されているが、現在、特に次の2点について再点検が必要になってきている：

- 現状では、本学の英語科目は卒業まで一貫した取り組みにはなっていない。そのため、大学として卒業年次までに学生に必要な英語力を育てることができたのか、把握しにくい状況になっている。
- 実社会での英語力の必要性は、年々高まっている。しかし本学の現在の体制では、特に高学年での英語科目数は限られている。

現在、学部生の一般教育英語科目終了後の英語力は、各学部委ねられている。一般教育英語科目担当教員と、各学部の専門英語科目担当教員との交流は、現状では乏しい。従って、両英語科目の授業内容について、双方の教員間で共有や連動はできていない。しかし、国の中央教育審議会が出した「学士課程教育の構築にむけて（答申）」（2008）は、大学での教育課程では一般教育や専門教育という従来の枠組みに囚われず、一貫した学士課程教育として組織的に取り組むよう提言している。また、他大学では、英語科目を全学で4年間一貫して取り組む試みが既に報告されている（e.g., 九州産業大学 2010）。

社会経済の地球規模化は一層加速し、様々な文化的背景を持つ人との関わりも、増加の一途をたどっている。こうした中、英語力の重要性については、これまで繰り返し指摘されてきた。最近では、2008年に内閣の諮問機関として設置された教育再生懇談会が、初等教育から高等教育までの全ての段階で、英語教育を強化するよう提言した（教育再生懇談会 2008）。また、文部科学省が設置した検討会も、主に初等・中等教育での英語力向上に向けた具体的な施策を提示している（文部科学省 外国語能力の向上に関する検討会 2011）。本学でも、以前から学部生向け外国語科目履修期間の短さが指摘され、在学中に希望すれば常に語学クラスを履修できる体制づくりが提言されているが（富岡 2006）、これまでに具体的な動きには至っていない。

このような学内外の状況を踏まえ、今後の本学での英語科目のあり方を検討する手がかりとするため、卒業年次の学部生を対象にしたアンケート調査を計画した。この調査では、特に次の2点の把握を目的とした：

- 一般教育英語科目終了時から卒業年次までの間について、学生の英語学習状況や英語力の必要性を把握する。
- 高学年次で英語科目を増設する可能性を探る。

### 2. 手続き

アンケート調査の実施計画は、2009年10月と11月に開かれた学内の外国語教育推進部会で審議され

### Ⅲ 研究論文

た。まず、10月の部会での意見交換を踏まえて、アンケート案を作成した。翌11月の部会で内容についてフィードバックを受けて修正を行い、調査計画の了承を得た。そこで、まずは2010年1月に、全学部中1学部で試行調査を実施し、その結果を踏まえて全学部での調査を行う計画とした。本稿では、このうち試行調査の結果を検証する。

試行調査は水産学部の協力を得て、同学部を2010年3月に卒業予定の学生を対象に実施した（表1）。

表1 試行調査の概要

調査期間	2010年1月20日(水)～2月19日(金)
対象者	鹿児島大学水産学部4年生のうち、卒業予定者全員(144名)
実施方法	水産学部がMoodleで実施したアンケート(必須)に併記して実施
回収方法	Moodle
総回答者数	124名
回収率	86%

水産学部では、2010年3月の卒業予定者全員を対象に、別のアンケート調査を実施する計画があった。このアンケートは、Moodle(全学の学生が利用するオンライン学習管理システム)上で行うよう準備が進んでおり、本施行調査もこのアンケートに組み込んで実施できるよう依頼した。この結果、アンケート調査での回収率は通常20%前後(Denscombe 2007)といわれる中、本調査の回収率は86%に達した。

アンケートの質問項目や配列は、外国語教育推進部会でのフィードバックも参考にした。例えば、「3・4年生でも英語のクラスがあった方が良いと思いますか?」という質問では、実際に履修するかどうかは別にして、あった方が良くと答える学生が多いことは容易に推測できる。本アンケートは、このような質問で単に学生の希望を聞き、それに合わせようとするのではなく、学生には英語力の必要性について、主に客観的な事実や実態を聞き、今後の英語科目のあり方については、その分析を元に教員が検討する、という方針で作成した。

### 3. 施行調査の分析

アンケートでは、大きく2種類の質問を設定した。1つ目の質問では、英語力を大きくA～Dの4つに分け、それぞれについて、大学3年次以降に学習の必要性を感じたことがあるかどうか、感じたことがあれば、具体的にどのように行動したかを聞いた(表2)。

表2 英語力についての質問項目

英語力:

- A. 会話やメールなど、英語で日常的なコミュニケーションをする力
- B. TOEICや英検など、英語の資格試験突破のための力
- C. 自分の専門分野について、英語で読んだり、発表したり、文章を書いたりする力
- D. その他の英語力

質問A, B, Cの選択肢:

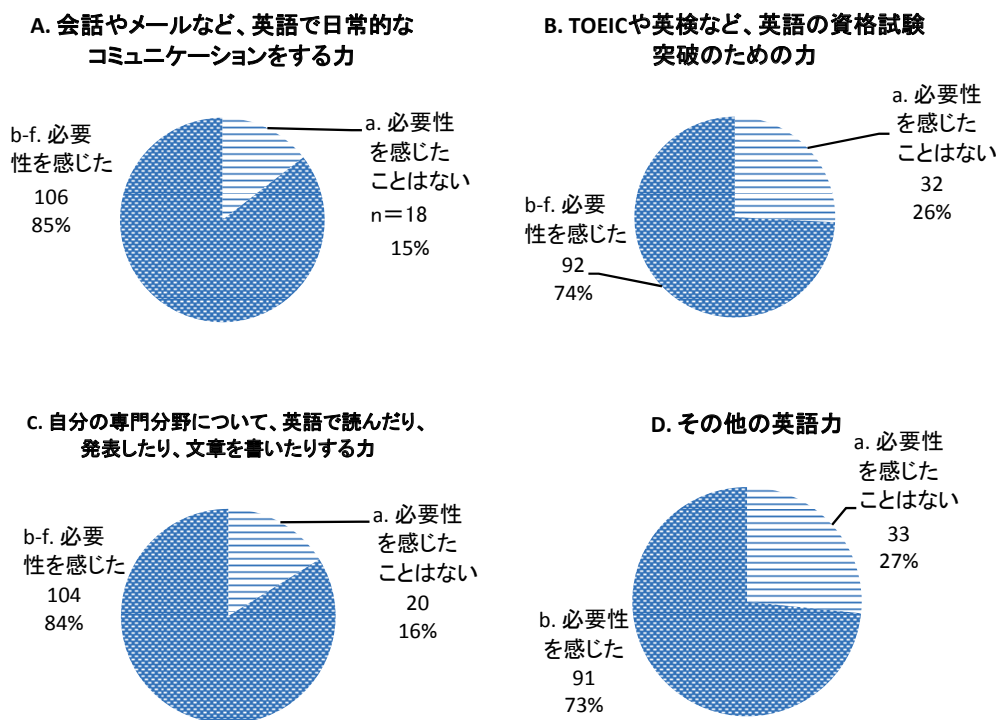
- a. 必要性を感じたことはない
- b. 必要性を感じたが、何もしなかった
- c. 必要性を感じ、大学で3・4年生向けの英語科目を履修した
- d. 必要性を感じ、大学以外で英語を習った
- e. 必要性を感じ、独学で学んだ
- f. 必要性を感じ、上のb～e以外のことをした:簡単に説明してください

質問Dの選択肢：

- a. 必要性を感じたことはない
- b. 必要性を感じた：簡単に説明してください

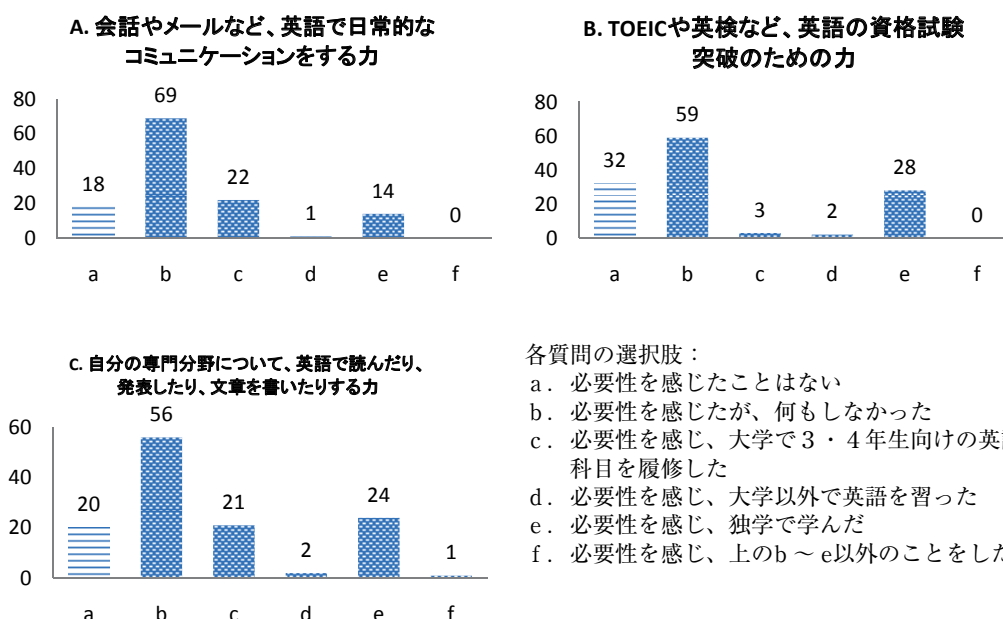
はじめに、これらへの回答を大まかにまとめた。図1では、各英語力の必要性を感じたことがない選択肢aを選んだ学生と、感じたことがある、選択肢b～fを選んだ学生とに分類した。これらから、A～Dの全ての英語力について、大多数の学生が3年次以降でも必要性を感じていることが分かる。

図1 各英語力の必要性：概観



次に、図2で回答をより詳しくまとめた。

図2 各英語力の必要性：実際の行動



- 各質問の選択肢：
- a. 必要性を感じたことはない
  - b. 必要性を感じたが、何もしなかった
  - c. 必要性を感じ、大学で3・4年生向けの英語科目を履修した
  - d. 必要性を感じ、大学以外で英語を習った
  - e. 必要性を感じ、独学で学んだ
  - f. 必要性を感じ、上のb～e以外のことをした

注) 図注の数字は回答者数を表す。

### Ⅲ 研究論文

「A. 日常的なコミュニケーション力」と、「C. 専門分野の英語力」については、それぞれ大学で3・4年次向け英語科目を学んだ学生が20名前後いた（選択肢c）。このことから、水産学部では高学年次向け英語科目について、学生の必要性に応える一定の体制があることが分かる。

その一方で、各英語力ともに、必要性を感じたが、何もしなかった、という回答が突出している（選択肢b）。また、独学で学んだという学生も、多くはないが一定数存在することが分かる（選択肢e）。つまり、英語力強化について、高学年次でも潜在的な需要があることが伺え、このような学生へのさらなる受け皿づくりを検討できる可能性がある。

「D. その他の英語力」は、予め想定したA, B, Cの3つ以外にも学生にとっては必要な英語力がある可能性があると考え、そのような声を汲み取るために設定した。そこでこの質問では、必要性を感じた、と答えた場合、簡単な説明を求めた。しかし実際のコメントを見ると、以下のように3つの英語力の中に分類できるものが大半を占めた：

- 留学生とコミュニケーションをとる時（7名）
- 日常で相手からの質問に自分の意見を答える際に必要性を感じた。（1名）
- 海外のニュースなど報道を理解するために（1名）

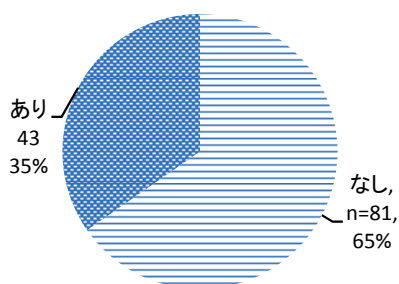
ここでのコメントから、回答者には3つの英語力の定義が、必ずしも明確には伝わらなかったことが分かる。今後この調査を拡大する際には、より分かりやすく修正したい。また、必要な英語力は、設定した3つではほぼ集約できそうなことが確認できた。

ここまで、A～Dの英語力の必要性について分析した。これらから、各学生が必要性を感じて何らかの行動に出たか否かは確認できたが、最終的にそれで十分な結果が得られたかどうかは分からない。そこで、2つ目の質問で次のように尋ねた：

あなたが大学3年次以降に必要性を感じた英語力を身につけようとするとき、大学の授業や施設、その他の学習環境で、何か不十分だった点があれば教えてください。また、その改善案もあれば教えてください。

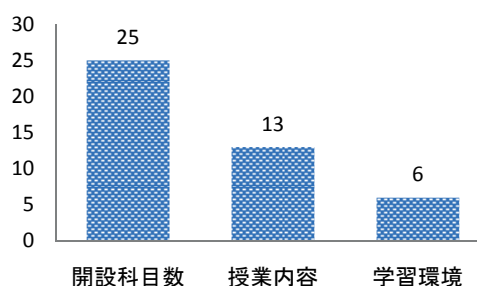
まず、この結果を大まかにまとめた（図3）。回答者の大半が、不十分だった点はない、と答えている。一方、先の質問では、英語力の必要性を感じながら、何も具体的に行動しなかった、という声が多かった。つまり、学生にとって必ずしも学びに応える支援体制が不十分だった訳ではなく、環境は整っていたものの、十分活用できなかった、ということも考えられる。

図 3 高学年次に大学で英語を学ぶ際に不十分だった点



次に、不十分だった点があったと答えた43名の回答を、図4でまとめた。

図 4 不十分だった点の内訳



注) 図注の数字は回答者数を表す

不十分だった点は3点に分けられた。中でも開設科目数の少なさに関するものが最も多く、高学年次でも英語科目の充実を望む声があった：

- 教養の英語の授業がなくなると、英語を学ぶ機会がなくなる。水産の専門英語以外にも授業があれば良い。
- …大学4年での専門英語（学術論文など）で一気に難易度が上がる。しかも、二年後期～四年次の専門英語まで、英語を全くせずして、いきなりの専門英語（自主的に英語を勉強しない限り、この一年半でほとんど英語忘れます。）。大学で英語を学ぶのならば、四年間通して英語の授業を設けるべきだと思う。

授業内容については、高い授業水準や実用性を求める意見が見られた：

- 大学の授業に関しては英語を学ぶと言うよりも、英文を丸暗記といった感じで、根本的な英語力増強に繋がっているのか疑問を感じる。

学習環境では、英語を使った交流機会の充実を求める声などがあった：

- 留学生や海外から研修にくる方との交流機会があればよい
- …英会話をする機会、例えば簡単な討論をする場を設けても良かったと思う。

コメントが示すように、英語学習機会の充実は、科目としてだけではなく、様々な形態での取り組みが考えられ、検討する余地がある。

#### 4.まとめと今後に向けて

本試行調査の結果では、一般教育英語科目終了以降に学部で英語科目が開講されていても、英語力強化に対して、なお潜在的な需要があることが伺えた。また、開設科目の充実を求める声も一定数見られた。これらから、高学年次での英語科目について再点検を行い、開設科目の増設も視野に入れる、という方向性は、学生の実態にも即している、といえる。今後は、この結果を基に全学規模に拡大した調査を実施し、さらなる検証が求められる。

#### 謝 辞

本試行調査は、本学水産学部のご厚意で実施できました。特に日高正康先生には、実施準備からデータ集計まで、数々のご協力を頂きました。また、学生の皆さんには、卒業直前の慌ただしい時期にアンケートに回答頂きました。ここに深く感謝致します。

#### 参考文献

- 九州産業大学 語学教育研究センター 英語教育実施ワーキンググループ（編）（2010）『平成19-21年度文部科学省『特色ある大学教育プログラム（特色GP）』 全学共通英語教育による4年一貫した取組 実践的コミュニケーション能力の育成を目指して 最終成果報告書』
- 教育再生懇談会（2008）『これまでの審議のまとめ ー第一次報告ー』
- 中央教育審議会（2008）『学士課程教育の構築にむけて（答申）』
- 富岡龍明（2006）「鹿児島大学の共通教育外国語教育改革の模索」 鹿児島大学教育センター年報 3, 18-24.
- 文部科学省 外国語能力の向上に関する検討会（2011）『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～』
- Denscombe, M. (2007) *The Good Research Guide* (3<sup>rd</sup> edn.) Maidenhead: Open University Press.